

パリ万博80周年「電気の精」の誕生日を祝う会



MAMVP Raoul Dufy la Fée Electricité photo Kleinfenn

2017年5月24日

主催 電気学会
電気技術史技術委員会
日本経済大学
協賛 日本工学アカデミー
日本CIGRE国内委員会

「電気の精」とは

La Fée Electricité

1937年に開催されたパリ万国博覧会で、ラウル・デュフィはフランス配電会社のパビリオン「光と電気館」に10x60メートルに及ぶ壁画「電気の精」を制作した。1937年5月24日のことである。

その後、この絵は、パリ市近代美術館に移され現在も展示されている。また、10枚組となるリトグラフが350セット作られている。

ラウル・デュフィは翌年レジオン・ドヌール勲章を受章した。



プログラム

講演 1.「電気の精」を紐解く

田中國昭（千葉大学）

電気の精に描かれている科学者の紹介

2.「電気の精」リトグラフと「アラゴー」の円盤の行方

松本栄壽（日本計量史学会）

初版35枚と初数125枚の行方からパリの科学の原点を追う

3.「電気の精」と科学技術史

竺 覚暁（金沢工業大学）

科学技術稀観書による教育

パネル討論

司会 鈴木 浩（日本経済大学大学院）

パネル討論の進め方

1. 関連情報の交換
2. 「電気の精」に選ばれなかった科学者
3. 「電気の精」の活用について

日本におけるカラーリトグラフ

所蔵が確認されているところ

○伊丹市立美術館	展示はしていない
○岡崎世界こども美術館	展示はしていない
○金沢工業大学	展示している
○東京電力電気の史料館	展示はしていない
○東京プリンスホテル	展示はしていない
○東北電力三居沢発電所百年記念館	展示している
○横河電機	展示はしていない
○早稲田大学理工学部	展示している

所蔵が確認されているが特定できていないもの

- 軽井沢地区 個人の別荘 いくつか
- 伊勢志摩のホテル

参考とした情報

展示会

- ・2009年4月 三鷹市民ギャラリー
- ・2014年6月 渋谷東急本店BUNKAMUAザ・ミュージアム

放映

- ・2014年7月13日 NHK日曜美術館

新聞

- ・2016年3月13日 日本経済新聞

雑誌

- ・1996年4月号 電気学会誌
- ・月刊誌「東京人」探検 電気の史料館

出版物

- ・電気の精とパリ A. Beltran, P. Carre、
松本栄壽、小浜清子訳、1999年12月玉川大学出版部

研究会

- ・宮地巖、「ラウール・デュフィーと電気の精」電気学会電気技術史研究会
1996年2月29日



東北電力 三居沢発電所 電気学会 でんきの礎 第10回顕彰



電気の精 東北電力三居沢 百年館展示

音と光が押し寄せる 描くとは奏でること



「電気の精」よりオーケストラの場



ペル、エリソンなどを多く偉大な画面を埋める。電気の精なども描かれている。

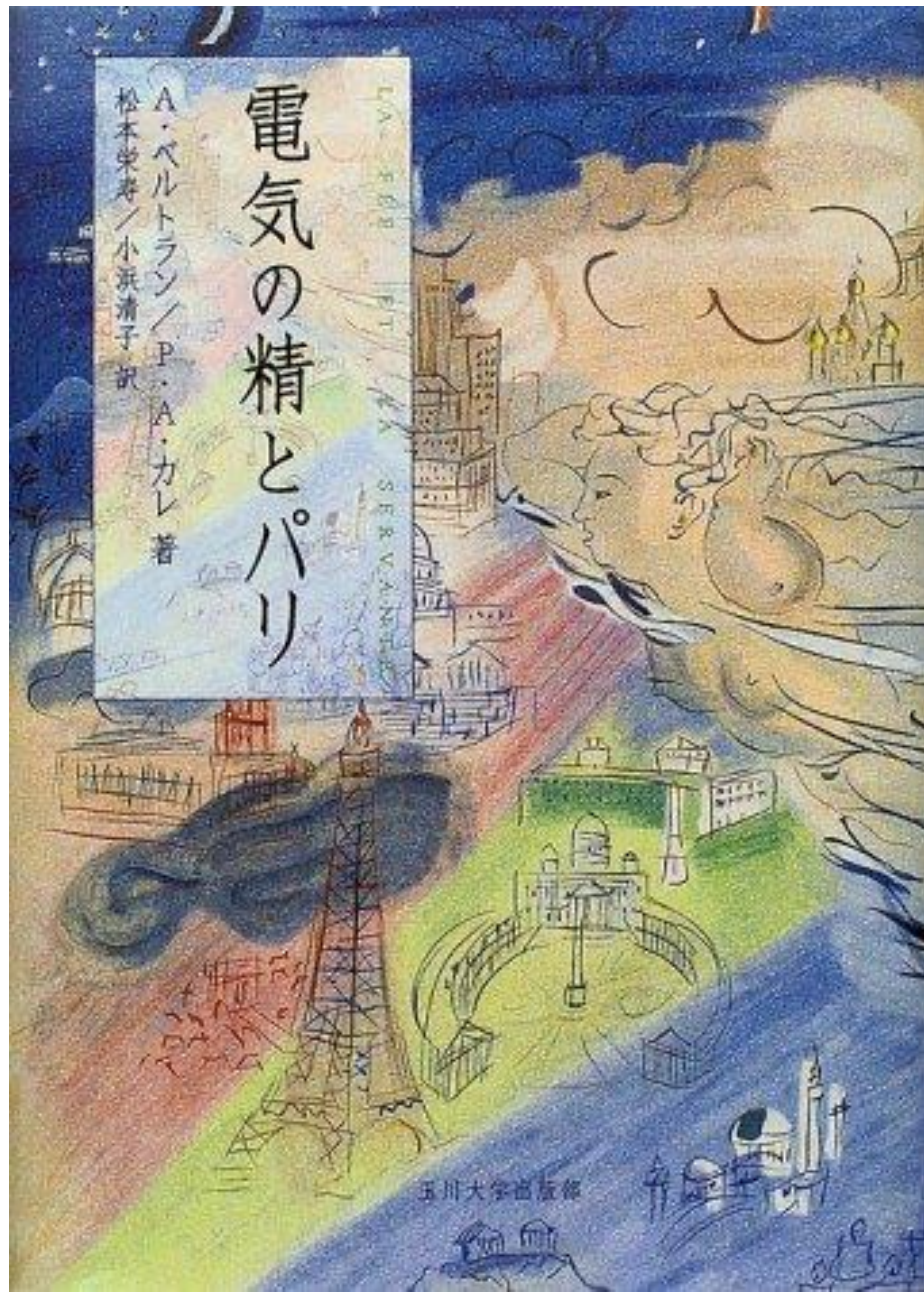
□ ■

つぎに見えて、ちと写し捕写があった。オーケストラの演奏風景。なぜ、電気の精の中にオーケストラが登場するのか。指揮者の近くにはピアノが、オケストラの後ろには合唱団が、この画面は、合唱団のピアノ、協奏曲など、この世に存在するものか、音楽の心を写してもよく知っている画家の作品だけに、そんなことをいい加減に描くものであろうかと思議に感じた。

「オーケストラの」を「電気の精」に描き直した。

「電気の精」に描き直した。疑問に答えてくれたのは、パリのヴァレール・ユゴ博物館学芸員のマルティン・コンタンさんだ。コンタンの「電気の精」に関する著書を持つ研究者だ。

曲や面
どの調
・ルン
のつく
いぞ
つた巨
揮した
絵画
風景
盛大な
のうっ
晩年
院に入
に描い
見せて
た。今
色の粗
パレ
器や打



電気の精とパリ

A・ベルトラン / P・A・カレ 著
松本栄寿 / 小浜清子 訳

五川大学出版部



「光の画家」 ラウル・デュフィと 「電気」の物語

天才画家が人類に贈った科学への賛歌。



ラウル・デュフィ 1877~1953
(PHOTO: Roger Viollet / ORIONPRESS)

雨宮 甲^女

あめみや こう
1956年東京生まれ。
出版活動を経て
ジャーナリストに。
科学、技術関係の記事多数。

電気の史料館1階には、1937年のパリ万博で市民の喝采を浴びたラウル・デュフィの巨大壁画「電気」が展示されている。

上:「電気」の精、リトグラフ、10枚セット(電気の史料館所蔵)をデジタル撮影しコンピュータで合成した写真

電気の史料館1階のエントランスロビーを抜けるも、高さ約2メートル、幅2メートルにも及ぶ巨大壁画が現れる。ラウル・デュフィの名作「電気」の精の壁画である。

一九三七年のパリ万博の「電気と光のパヴァイオン」(以下電気館)の壁を飾るべく、パリ配電会社(現在の電力公社)の依頼に応じてデュフィが描いた壁画は、縦一〇メートル、横六メートルに及ぶ。

現在はパリの市立近代美術館に展示されているので、本物を鑑みながら見られる。電気の史料館は、パリ万博の後にデュフィ自身が壁画の下絵を基に三百枚作ったリトグラフの一群を所有している。

一九三七年のパリ万博のテーマは「近代生活の進歩」と技術であり、エッフェル塔の光の噴出のほか、照明をふんだんに使ったことでも有名である。

一九三七といえは、第一次世界大戦が終わり、スペインで内戦が始まり、チャップリンがモダン・タイムスで機械文明を風刺した年で、第 二 次 世界大戦を目前に控えて暗黒れ込めた時期である。電気館の隣のパヴァイオンには、あの有名なピカソの「ガルニカ」が展示されていたが、そうした時代の空気を反映したピカソの名作を、当時のパリ市民はそれと受け入れず、逆に電気や科学の役割と未来を、光を強調する独特の筆致で描いた「電気」の精は、パリへの喝采を博したという。建築家として有名なル・コルビュジエは「ガルニカ」がほとんどの入居者に背を向けるほどの対し、デュフィの「電気」の精の前では、大勢の人が長い間立ち止まっていたと書いている。

電気を介して人と神は結びつく。

さて、デュフィの描いた「電気」の精とはいかなる絵画とつながるか。電気の史料館が所有する一枚のスケッチをデジタル撮影し、それをコンピュータでつなぎ合わせた写真(上)を見ながら説明しよう。

絵の構成は、右から左へ過去から現

在(二一九〇年代)までの時間の流れを表し、上部に風景と神々、そして下部に人間が対峙する構成になっている。

描かれた人間は、いずれも電気技術の発展に貢献した百九人の科学者(なかには数学者や文豪もいる)である。

絵の中央上部に集まっているのはギリシア神話の神々であり、中央にいるのがゼウスである(中央に宙空を穿つ黒いゼウスの右隣が知性を象徴する女神のアテナ・ミネルヴァ、その隣が太陽の神アポロンである。左隣はゼウスの妻のヘラ、その隣が愛の女神アフロディテである。ゼウスの象徴は雷であり、ゼウスの真下の神妻は、そのさらに下の、人間界の発電機に雷が落ちて、よく見える。よく見ると、神々が立っているのは発電所の屋根の上であり、デュフィが発電所をリボン橋の山に見立て、雷と発電機を介して神々と人間が繋がっている構図になっている。

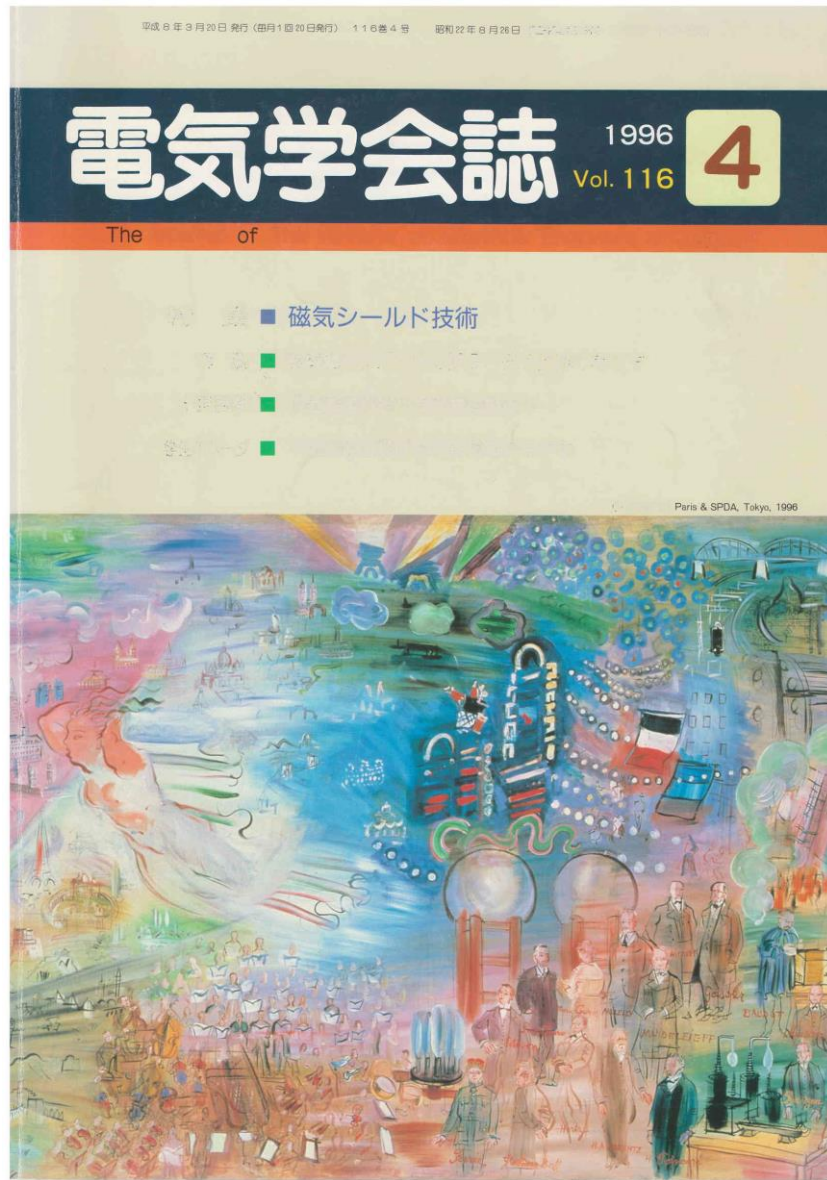
絵のタイトルになっている「電気」の精は、絵の左端のほうにいる薄衣のまとった女神のごとく、デュフィは虹の女神であるイリスをイメージして、たれた強い顔に向かって天空を飛翔する。彼女の頭上には三日月が浮かんでおり、地上にはデュフィの得意とするオーケストラが描かれている。これは電気の発する光によって昼と夜が融合し、豊かなハーモニーを奏でているこ

とを表現しているのだから、電気の精の視線の先には、世界各地の都市が描かれており、それらが包まれていることも表している。

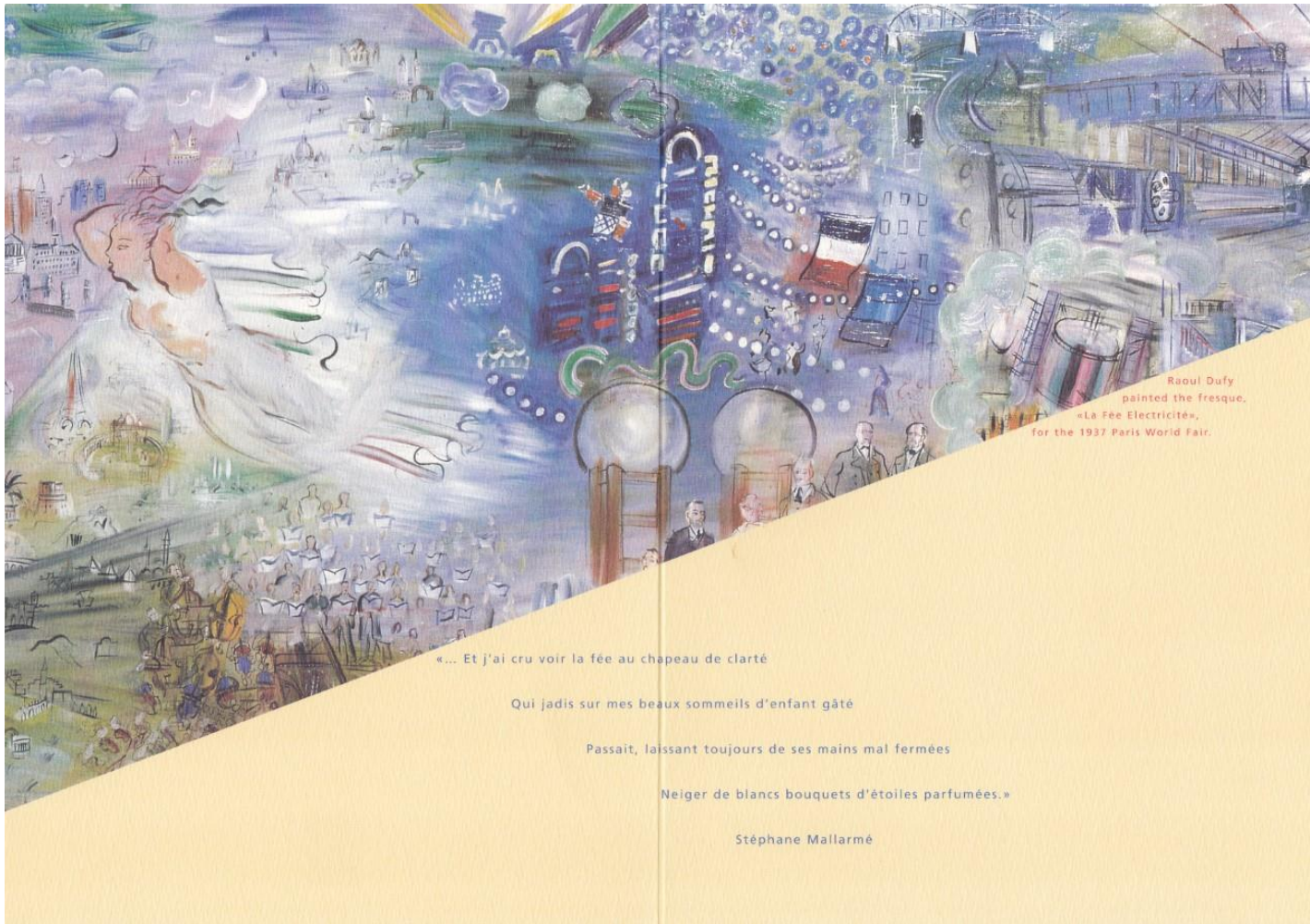
女神が見守めている方向は、右から流れてきた時間であり、一九三七年のパリ万博、つまりこの絵が描かれた時点よりも未来であり、電気を介して神々と結びついた人類の未来は、光の豊かさを得て、明るくハーモニーに溢れていると描かれているのだから、まさに、電気文明、科学文明への力強い賛歌である。

描かれた百九人の科学者たち。

絵の右に反方向、右端の光景は太陽が輝くと輝く田園風景であり、地上はアルキメデス、タレス、アリストテレスのギリシアの哲人がなやと話し合っている。空中に浮かぶのはオーロラであり、雲と風とつながった自然現象だ。前述のように、人物はギリシアの哲人から、時代を遡って凡人が描かれている。最後の五人はラジウムを発見したキュリー夫妻、電話を発明したグラハム・ベル、発明王エジソン、そして左端がフランス陸軍に無類を導いたアフリカ探検家である。そのほか百九人のなかには、物質の分子論で知られるローレンツ、元素の周期律を発見したメンデレーエフ、ビニル電気のベクレ



電気学会誌 1996年4月号 大久保仁先生



Raoul Dufy painted the fresque, «La Fée Electricité», for the 1937 Paris World Fair.

«... Et j'ai cru voir la fée au chapeau de clarté

Qui jadis sur mes beaux sommeils d'enfant gâté

Passait, laissant toujours de ses mains mal fermées

Neiger de blancs bouquets d'étoiles parfumées.»

Stéphane Mallarmé

EdFからのグリーティングカード

豊田淳一先生

Apparition

Stephane Mallarme

La lune s'attristait. Des seraphins en pleurs
Revant, l'archet aux doigts, dans le calme des fleurs
Vaporeuses, tiraient de mourantes violes
De blancs sanglots glissant sur l'azur des corolles.

— C'était le jour beni de ton premier baiser.
Ma songerie aimant a me martyriser
S'enivrait savamment du parfum de tristesse
Que meme sans regret et sans deboire laisse
La cueillaison d'un Reve au c?ur qui l'a cueilli.

J'errais donc, l'?il rive sur le pave vieilli
Quand avec du soleil aux cheveux, dans la rue
Et dans le soir, tu m'es en riant apparue
Et j'ai cru voir la fee au chapeau de clarte
Qui jadis sur mes beaux sommeils d'enfant gate
Passait, laissant toujours de ses mains mal fermees
Neiger de blancs bouquets d'etoiles parfumees.

あらわれ：ステファヌ・マラルメ

月は悲しみに沈んでいた
涙にくれた翼の天使が夢見心地に弓を持ち
湿った花々に囲まれながら ビオラを弾くと
白く咽ぶ音は紺碧の花弁の上をすべっていった

あれは初めて君の接吻に祝福された日
わたしは自分の夢に殉教し
悲しみの匂いに酔った
その匂いに後悔も消えうせ
夢は心の中に舞い戻っていくのだった

私は古びた敷石に目を向けつつ歩んでいた
すると太陽の光を髪に受けた君が
夕べの街角に微笑みながら現れたのだ
君の姿は光の帽子を被った妖精のようで
少年の頃に夢の中で出会った気がした
妖精のいつも開き加減の両手からは
薰り高い星屑が雪のように降っていた



電気の精に登場する人物の記念切手

滝井春雄様より

Science

Technology

Engineering

Arts

Mathematics